

『光塵』

一九九六年刊

断崖<sup>なぎ</sup>浜の曇<sup>なぎ</sup>がかりに海苔搔<sup>め</sup>き女

隠岐枯れて大赤<sup>あかなぎ</sup>断崖の吹かれけり

隠岐古海<sup>うるみ</sup>三人の子のひとつ凧

起ち転ぶ子にあつまりて露ひらく

荒海や佐渡の風垣<sup>がつちよ</sup>に灯の洩るる

つくしんぼ<sup>をち</sup>遠の淡海にかざし摘む

青蛙飛び交ふ父の頭上の宙

ほの見えてひびきは胸に天の川

躬都良の恋みつら隠岐水仙は崖なぎなせり

山椒魚黄泉起きぬけの貌に雪

隠岐那久なぐの哭くは阿古那よ寒疾風はやて

渦潮や真上に滲むルドンの目

鬱塊の遊び出でたる海市かな

火蛾なだれくる炎上の古志の谷

衿あしに涙を溜めてかたつむり

雛芥子や塞ぎの虫も無重力

秋虹や裾廻すそみの白き島いくつ